

不確実な世界の中の中国—ポスト毛沢東時代の終焉か
高原明生（東京大学）

欧州での英国のEU離脱や移民排斥運動の高まり、メキシコとの国境に壁を築くことを唱えて当選したトランプ米大統領の出現など、最近の世界ではグローバル化と地域統合に逆行する動きが目立つ。ただ長期的なトレンドからすれば、経済のグローバル化と国家レベルの政治との間の綱引きは、今になって始まったわけではない。交通、通信技術の発達により、企業や市民社会、個人などの間で国境を越えてネットワークが発達する時代の潮流を押しとどめることは難しい。それらのネットワークを流通する「いいモノ」の流れを促進し、「悪いモノ」の流れを統制するための、国家の連携によるフレームワークの発達も続く。ただ、歴史の流れは作用と反作用によって常にジグザグに進むのだから。今の我々は、経済を主要因とするグローバル化に対して、それにブレーキをかける国内政治や国際政治の作用が強い局面に立っているように見受けられる。

不確実な国際政治の一つの焦点は中国である。中国は常に、米国の動向に敏感に反応する。トランプ政権の内向き姿勢を見た習近平政権は、自由貿易と地域統合のチャンピオンであるかのように振る舞い、経済外交の主導権を握ろうとする動きに出ている。世界の注目を集めているのは「一帯一路」構想だが、その実態と影響については客観的な検討を加えることが重要だ。

さらに、中国の最大の不確実性は今後の政治体制の行方に存する。習近平総書記は反腐敗を有力な梃子として自らへの権力の集中を図り、昨秋の中央委員会総会では遂に「党中央の核心」という地位を得た。今秋の党大会でねらうのは、党主席制の復活と習近平思想の樹立であろう。それには抵抗も強い。だが、もしそれらが実現すれば、鄧小平以来の集団指導体制からの大きな転換が行われ、いわばポスト毛沢東時代が終焉することになる。

いずれにせよ、習近平への集権化は今後の中国の内政、外交の展開に影響を及ぼさないではいられない。果たして、習近平の下での一極集権体制は国内的、国際的安定をもたらすのか、それともその逆に不安定化を促進するのだろうか。

1. 現在の世界——我々は如何なる歴史的局面に在るのか
2. 中国のイニシアティブ——「一帯一路」の実態とその行方
3. 習近平氏の下での一極集中体制——ポスト毛沢東時代の終焉は何をもたらすのか